

保育園児の上咽頭検出菌の10年間の変遷について

伊藤真人 中西庸介

金沢大学 大学院医学系研究科 脳病態医学講座 感覚運動病態学

我々は10年前から同一の保育園において、保育園児の上咽頭細菌叢の状態を調査し報告してきた。この定点調査を開始した1999年当時は、肺炎球菌では極めて高率にペニシリン耐性菌（PRSP）が検出されたにも関わらず、インフルエンザ菌の耐性化はそれほど進行していなかった。その後インフルエンザ菌に占めるBLNARの割合が急増し、2007年以後には β -ラクタマーゼ産生株のBLPACRが急増したことを2008年の本研究会において報告した。また急増したBLPACRが単一クローン株の流行であったことを報告した。今回、過去10年間の肺炎球菌の耐性化の動向についても検討するとともに、この保育園でみられたBLPACRの流行はその後どうなったかについても報告する。保育園という半閉鎖的な特殊な環境では、早いスピードで細菌の伝播と流行の移り変わりがみられるが、2年前に保育園で観察されたBLPACRの流行の後、臨床検体からのBLPACR分離率の上昇の報告も見られることから、今後我国における耐性菌の更なる増加が危惧される。